百馬原

ひゃくば

専用佳紙
精工刷印
不破不落

式亭三馬戯作
歌川國直狂画

西垣文庫
文庫10
6749

文庫10
6749

此本翻刻無用

題古今百馬鹿巻首

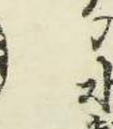
夫馬鹿乃名目一なるず。朝鮮紅毛いきさつ。愚癡無智なるく卑ゐれる。天竺流のお釋迦乃經論。頑愚蒙昧。曾鈍愚愚ゐ。おの〳〵阿房漢名にして。癡呆白癡とけうべふゐ。唐山乃俗語を暗紀しる小説家の切抜なり。和訓か「おろ〳〵」譯〳〵そゐ以降。馬鹿に附る藥いなるしど安本丹乃親玉おく。雲通玖。猿坊。りやうたくし。接松。そう。空氣ゐ類ゐ愛く古調ふて。間抜。鈍癡氣。申。ゑか者ゐ。近体の称号かるべく。余程置て来ゑ貨物ゑ。迂遠ゑ言なりを。

太呂四郎。金什。禁太老。速〻通〻。隱語乃捷徑。長を呼
小面長〻。短を呼ぶ小不足〻〻。たゝけを糞ゐ穢すと想ひ。
腑脱に玉け賞ゝのふ如何。抑ぐらぐるを好觀物〻〻肇め。
のゝのゝ可咲演劇より嵌る。斯〻〻ゐ癡呆を拳こ。癡〻
馬鹿を畫さゞ所謂百の口些〻不足放空素子放伸さ
鼻毛乃ぎ〻を竭す。結構人を癡律義を到頭ば全ぐ
へげ〻なり。哥哥を伯父の上に立人支難く。賢六を脱
作ぶ下に立人支難〻〻ゐ馬鹿の馬字と名
のゝ〻三馬といふ癡漢あり。自己が白しけを捌く放下
〻〻世人の暗穴を探〻。目て古今百馬鹿といふ。看

官ゝを閲すゝ人を馬鹿〻〻しゝふてなる迄。
素より兼知の文盲短才。寔ゐ華押れるの人真侶。
三本足らぬ戯作者がお利口らゝさを顧ル。吾ぶ〻ら
吁馬鹿ら〻〻ざんす。云爾。
文化九年壬申九月中浣。京阪風ゐ地方を告さバ。
常磐橋御門通浅草筋下ル本町。江戸言なるゞ。
本町二丁目乃木戸の〻二軒目。惠を仰ぐ江戸の水製
法乃閲ゐ筆を採る。

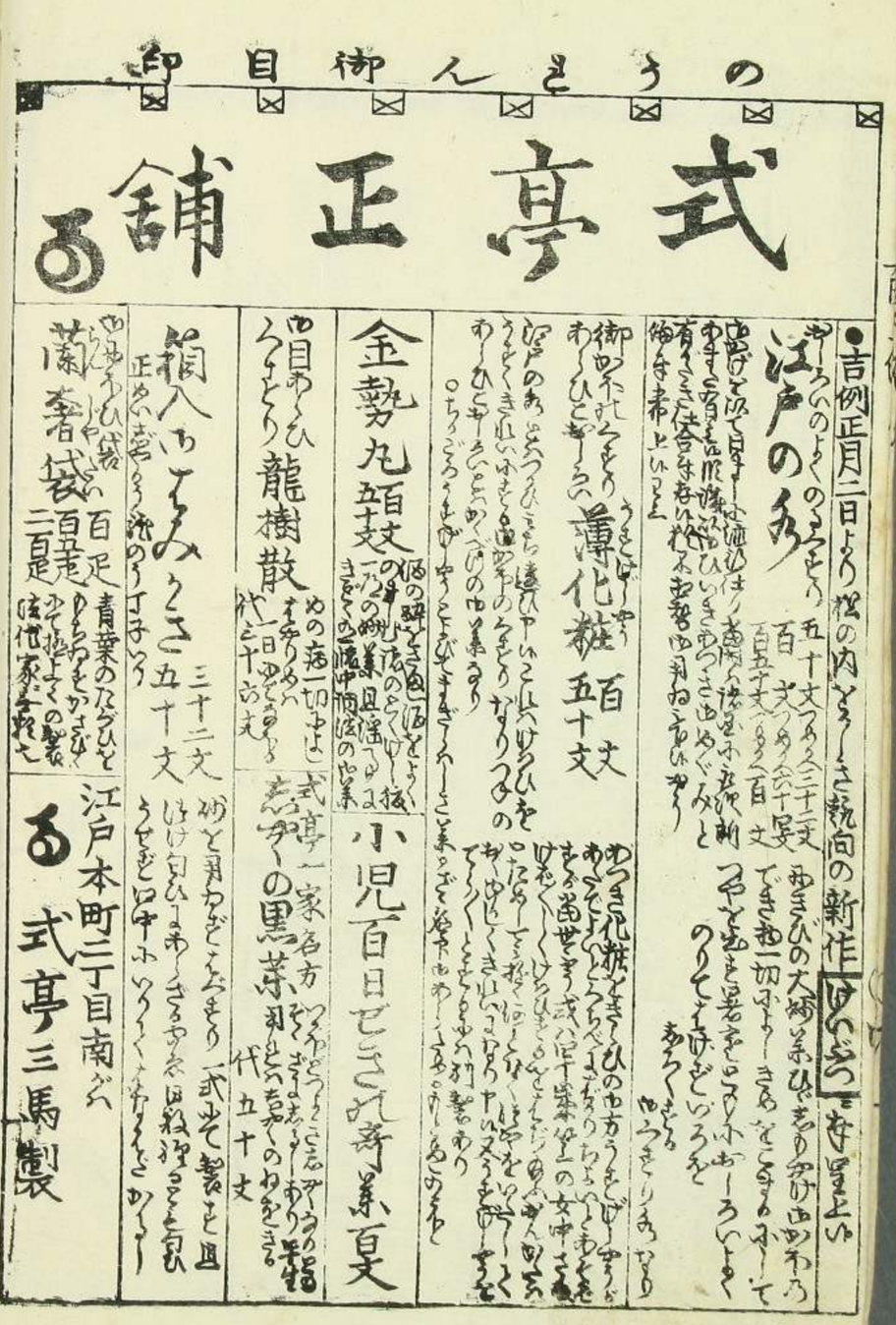
ひの〻所謂金平本ゝ作者

式亭三馬戯題



楊枝隠八傳

馬鹿のちやなま
東西


のうさんぶ御目印
式亭正舗
●吉例正月二日より松の内さそ～さ乾向の新作
江戸の春
五十文
百五十文
百文
百五十文
百文
百五十文
百

女房乃
意ふ
うつ
ま
豆腐
ちりなく鍋
ちりなふ ちりの形
亟亭三七

鼻毛のこと　附真くそ馬鹿

女房よのろけること　ぶつぶつひよやさもちとやさあふ夫婦中ぶたれあまりよぶ
いさうひもりとよりはもあるもなさけなさとけうとびあとりとりとふぐもと
めより事を

●あるとものいふ言葉に初へけどどらつとへおやへを
鼻見しくえる　トもせうふやさいたいなるいあいさつなりまでて女房の
かとさんなどのるるをすまんなるおじぎつなのおりあるひこうれ
ぼをふさねうえべ一体まさ蔵あるとさとるもの初へス
女房といふものの内をまりなふもの。事をといふものの
外をまりなふものぞそとどうもとぶおそくゆる
ぐとねへしつとめぐとわりふがいて。男といふものの外へ

出る。いろくの用がそるもんざ▲ハイくかこまりは
さなるかど男といふものの外へ出とび用のそるあ
そのうちをと別しくまんなどの娘こどりふこり
つさの方ざろ。出用ハうかあらうのさそとそれ
しやう初へでとはまいすやう紙てそうまとまざろ
おゆりもおそくなならうし。又ハ流海り日海りもごい
まとのさ。生涯のやうみお流虚ゆ法ものうけのうり
ちまさぞいぶん色るをを出精お出ーなさいますそれで

おまへさんいち年ごろうがるてハ孫うゝつまら
孫へものさアイ。おまへ猪多めかどのあつてさものさ。婦婦
文字ハ豊猫をつまつくおみもようございませう。横
町のお損さんと周八ゲ而のかゝさんとあの藤のこの
いゝ半元服の娘をつまつく。芝居へお出があつてといゝ
ものもちやんと呼てそりまと。なるほど男を外と
ちうまゝものさまそのこの内ゝとおまへかど上手ゝかを
よつなゝ者ハあるまいよ。こゝとハきついこの迷惑なる

像ゞ。あとハ何ゞゝるアノ何さま。とそりゝ孫へ。とんゞ隣家
と着るゝんゞゼ。あの芝居ハ何ゞゝるゝ。あとも呑太と
電坊ゞ振向で。あとゝ仕孫ゝと中ゝ動るのよ。
おゝゝア不ゞゝと云ゝくもきろずよ引ゝれとゝ。ゼひ
なゝ上乗で往さのゞ。イエ。そとハきてません。そんな虚
ゞゝのつゝりゞハよそのの女中ゞふおちゝ中るゞゝ。
きゝゝハまゞ不義加さ。なんぞといゝべお友ゞちの
ホ作ゝかゞけゝ。おまへひとりゝ顔をそゞるゞそりや

ゴラ〜ゴラ〜ゴラ〜

お屋敷あぐりの野暮ぐ同ふを志ちをもたをけらい娘
こどもへまぐるものる。晴八が面のかゝあめぐ。なんぞと
いふとまをくさんをほろ生ふ来く。上句の果ふ日ゑ
引へをとく迎面の女子ゑあをいつぞいよよびあつめて。
おまへよおぐるせるめぐゃと酒よ変ちとろよ出く。
どつぴくさるとぐ相ふあの孔方だろも一年出いて
のとおぐめをと●そろやとぞつを合といふものを
あろる一つを合とへべまをひるのうちゝ抜へぐよそのの

女中荒を大ぜいあつめて酒宴をおぐるゝ
下ぐがなくてなるものろ。見と笑
ゝおまへのなるものいこんる通ぐまをよ。出ぐも
本面ろゝの使ぐといつく来ゑいぐ行のあ年げよ
呼くゝパテナとをつゝ一緒よ出くお出ろとつ
ゝ。この面へ連ゝくとをつく。そつと裏ゝ横町へ
曰つてゝゝ。結縮緬よ屋板の帯をあと女中ら
黒縮緬の面高祖頭巾とぐつく。角の番屋八傷よ

立居もまるでこどもナント どうでございます。●ウ ゴザそうやア。
何。あゝア▲いつさ皆まつて そりまをよ。あゝ〳〵 唖然ゆく
てでございます。まつと 翌朝色を真青ふゝく
眠さうな顔でおゆるまつぶ。ほつと出く一日 仕事へか
ゆくお出でおそくと 晴八が ぶらつとつつ。三を
もゝ迎ふよつつ。ばいさんぶりお出でそん 孫へなどを
まゝ〳〵ゝい虚を衝てよつつ。あの晴八おどふゝいまつる
ものいかない。ホニハ 孫が立てくなりやア まゝ孫へ。●亭 出れてゆゝ
主 うまつてゆうり

今までのお汁更よ 見ずぶそんなほまゝ孫へるゆと
ゆるものつそりやちつやそんつものこんあらう
ゆまでぶ。ゆをつまつまつまつ孫へのよ。駄つくまりやア
方曲ゆ孫へ。ゆれゝぶつくその通りス。金ゆつゝ 吟つく
まつくも。ゆゝゆ懐あるまさをゝくゆて。酒でとのんで。
男とぶちつつて居ちまちやア。あんまりそゝく
孫へ▲まつゝゆ男ゆをちつゝうまつつゝしゆなく
てんはぶきません。先刻もさうさ。お濃のお妻さんか

ちよんと来るとおそひごろ〳〵。往くまえてこのう家
酒がちでまつくわるよさ。そこへ往くイエラてこいとと
いつと往くこと。一ツ二ツ お銚子をたべくわると。野路さんや
遊二さんが来く大酒りとなんてこのさ●そこを能うげ
んかしてたべをもむるを。野路や遊二う来く呼よ
へさんごと〳〵でんとおりろ〳〵ぐなぐ〳〵けるご。夢を
をさ〳〵おいく男の中へ寄け込もを出来さねへ中つと。
おしゃ中さりちい嫌ごご肉を綿る女房の浅ごやあるう

うへく考くえ分▲ハテ好きへでとあるまいよ。どんなな
好男が来てねもうが不好ごでとせうごやあ〳〵。ス野暮
ごう〳〵かまひへもを〳〵。たくひを紙生を人があつ
てとそそへお嫌なさるどの堅義ごう〳〵不好を
哭〳〵くなつのさ。女房ふ不好をさとるかうふ好きへ
ごとあるまいよ●そうやあさうごうれど。柄をきげうや
そつとさきをとりるる。お熱体女乃方柏不婿を長血
白血よりい悪い。そんなつまようさ。おとそさあうち

ぢゃ、孫くがあんまり踏付ふまるを苦ごく〜いるのよ。江戸を
踏つけふ〜とゝぐ〜いまとるを。ぢれんてん。さいぜんてう
ゆうそなたろうぐ〜ぢゃ。ぢてあるは。ゆ。遊んどまゝ。ひ通りのまぐのを。
見くを男ふえせくい。色恋の苦さ。たゝく〜て
ニレ。山桜よりぐ荒るゝ。縁入地なんぞん出来るゆん
ぢゃ、孫く。江戸のあを。ぶいく。ぶるゝどうぢ賞
て来くお見うさいます。嫌郷文字や豊猫ふる買く。
お半ぐゝ。ホニ三馬が西の落化粧といふ顔の茶を洗

まゝぐいるをくのゆまとよ。道理ぐ美しいとゝゝ
ニャいやよ。ゝゝ孫く。山落化粧ふあ〜ひ粉ふをなゝ。
白粉ふをなゝ。いゝを調法ぐぐ〜ひまとよ。そゝて、
お手よ入くお仕合せ。ハイく。おまくのおゝくさん
あ〜髪と髪結さんよ。結ふせゝう。笑地を外へ出〜く
後ゝるのぐ内お座ぐ。ゝゝ。ゝゝの毛ゝよ髪をひゝりで
結ひ。まぐり形ふを神を通さふる毛ゝふ。遊上ゝる
りのゝお嫌さ。かゝぐり女房を床の間乃

おもてあつらへ。さてさてうまつしやるぞちやう唐土の獅子の焼
物の布袋さまとおんあがれよ。あつらへくださん
ぞう引合ますせん●久しいりのさゆう面目崩も家う
右ちさくなんてぞ。ちと風を換へうハうく
換まとゝを。風さまのはきよいなりゝ何なりと換まそう。
糸鬢こでも。剃下奴まで。もとゝ次第●あゝあの面
笠片まづゝ居ちとにくおそとてハそれでも
所風おん急ふしなゝまつ稼へりのさ●さてういひる

うん。尾上屋とこの形を。おとゝぶ口を酢くして剃頭世
話女房にまて。こゝ高学者のは丹精ゞとゝひかハまへい
さてとゝ襟を剃付くお気かさのまゝか●そ剃ゝく
かゝう。あゝのゝ襟ぞぶ好ゝ剃浸ぶまるハきたい
上てゝ下てゝさ。はかる坊主襟をつゝゝく●そとゞ
高学者の欲見ゝハいやよ●杜若よ田之助園之助といふ
ちゝを調合ゝく中ゝくゝハそのぞりのをや。
世間の娘はゝちゝが遠ふ筆ゞ●十二月少くだりゝくゝモ

些細ものさ。ト女房のまへでだろうトキニ今綿をへ居るまのを
松坂屋うゝ家へ家よかつさ縮緬。あるゝかどとうかいもの。
なんぞ路考茶ゝ▲イヨ媚茶さ●ゝいゝ。媚茶よ黒裏
といふ事をひきつく裏模様をとそこで▲黒裏ハあん
きりたんとあゝゝ裏模様よ赤ゆーさおまへの浴
衣でん拵ゝとく黒裏ぶさ山模様を可愛らゝく
よいゝ●そいつをあとて好ませると臺南瓜と
琉球芋よ。海嵐の弧漢とちゝゝさあつふもる▲ヨヤいゝ
ゝとゝゝゝハ海嵐ハたきゝひさ●生ニさゝうぶつけ
▲お門遠さ●おとと嫌ぶ海嵐ハ女の好くものよ▲食
物のさるものがさゝゝ意地の悪いものぶ。おいしいものぶ
なぶさゝゝさんぞお驚ゝ人。暗ハ必ず人はゝと
とつく●甚物を否味をこゝろヤア氣ぶ孫をんゝ
野路の遊ニよ後ぶるさ▲はきゝと孫人変ぶ孫。七里
けつゝい●今小魚甚ぶ来るぶゝゝ▲河ぶ煮ゝゝめハ
いやぶゝさ。女房少ハ宿で煮さ拵ゝたりなぶさゝを

●又いろ〳〵おそなる。おそ平あるより。桃門ゑりと
冬鱇ゑりと作付るべくいゝ▲このふいてゝゝ子。おまへの
お好きものをさ。但し女ハのけく●是へ赤ゝ入いよ。
ハテなんでもおまへのお好き▲釜碗蒸の中へ金糸瓜と
入ないのをたべゝゝ子●そもぎりゝ▲いゝ〳〵なぐらゝる
ものゝ。女といふものハホンニけしゝ者ゝゝ騒ゝゝいゝ出ゝが
ゝゝとなんとゝ騒りゝない●釜碗蒸へ翌日芝居を
見せゝくれ三のを食せゝゝ▲そもゝハありがゝゝ法く。

そんゝ〳〵若者ハ何よせゝ子ゝ下ハさゝゝさ三ゝ中ゝ上へ
何よせゝゝ●さゝゝさ三ゝゝゝぞハおりひきんくいゝぜ。黒
裏がきゝゝり拵ふといゝ出ゝぐゝ〳〵ゝゝぐ利居る▲裏付も
ゝゝ。真田入倦ゝゝ買ゝて居ゝんゝゝさいます●買ふぐゝ。
ゝゝ〳〵月買ゝゝのぐゝぜ。家ゝゝ倦ゝゝ▲真田ゝゝ否ゝく
●だゝ〳〵緒少でゝゝきるがいゝく▲小僧でハあるまいゝ●三
足の駒下駄ゝゝと四五足溜ゝゝゝ▲あるゝゝ限ゝく譲
拵ようゝゝきさゝか●大造ぐ▲そもゝぐゝと女小粥金を

つゝふより八●アレガ又たゞまんぢゅうんでと罵こり。
一体三足の駒下駄へまつくんの道中をる時履こ初ぢ。
今ぢやア町の女ガ皆履く様ようんぢゅうそ初の芝居
へ襟と呼く三足の駒下駄ガよりらう▲ラケけ〜〜
移べゴレ三ヤ。あの。小僧よさうこ云その。江戸の名乃詰入と
罵セこく。あとこの向側の江戸様で。常磐香といへ
びんつけと三本。あとこ三十二銭ぢゞふよ。甚ガ人ア
玉屋で紅を頁銭。まつけ寒の紅八丑の日ふ罵ふう

世ぢぐよつ。白粉ハ薄化粧ガ有ろう〜〜ト。夫う
紙後屋で黒猪価の頭巾をこれらうや●頭巾ハまぢ罵ん
こと移へぜ▲去年ぢんこのでごさいまと●そ罵ぢ
▲巾袋も瓢簞ぢ乃の尾張乃人いろりの絞巾袋よ。
あとこのハ丈夫ぢ縫ダトよいう〜●寒ハ七巾
履こぜ▲髪結さんよ結せる初こさんぢろ〜〜ん
てこ巾袋位ハよいのこ●ハ巾罵ハさ▲そ〜てこ。どんぢろダ
まぢ〜ハまとよ戸棚へ嵐ガ寒ハこさうぢ。湯具箱をさん

ざんぶかぐらくそ。なんぞ一度ゝ湯具をすぐる
嗤裂まゝ。ぶ。ぶ。腹ゲ立てくなり。移けど畜生
どうゝ。ちてゝ。ふ。ぶ。まづ早速移ゝ。ぶ。ぶ。
あとと絨後ぶぐ白縮緬を一反。ユウ。立人でとうら。
一反とふどうぐ。嗤裂ゝ。ふ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。
ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ。ぶ

お滿よ。そこを引張っておくんなさいまし。●ドレ此紐入れよう。
ヲヤト業知く。トト上手の方へ引て多くさせをつむ。▲アレサ。其紐よ引抜んじゃア悪
くなりまさアる。●どうもるものゞ。▲大概まちがんぢゃ。
其くまを表方の袖の中へ入れてく押つるものアレサ。其紐
得ふ〜て。●溜ふ〜く。ドレ。ハテナ。是じゃア中略。▲アレサ。右の
くまを左りの袖へ入れて。左りのくまをこんちく。●ヲヤト
よく。むう〜く。▲そもつぐまんつうくまを為まく
●ヤ是へ大没ぢ。コレ三ヤ宝へ茅く代つく是と。●ようこそ

代〜ぢゃといよ。邂逅い旦那ゆとあいまるのさこをヤ
い。幸抱甲斐のないるさまヨ。三ヨ代せるると紐が引付
て上るるう。だいぶ〜ふうりまとるが。トいひながら下おの
ま紐をそこでゆる
ゆく。海神さるゞ代ゆとてこさうで下おの裾紐が
多い。ホイく巻角上おの裾へ是紐が入るるとゞ下おか
多いものさま。ちく〜下およ紐の安くなる。間へ強物の
ゆゞ上るといふうく樂へ樂ぢゃアこそうよ。ゆるく
上手せう。ゆく見へ紐つぞ。何をとる帯とすへ。是ぢう

化粧をするものもあり・中には本地がわるんど
▲アレアあんまりるのだんろう・ふつゝの落化くみるう
別くヤシヤぶゴウそこの蠅不入うゝ烟調ととんそんる。
おめんも一盃飲る。ゆのぞ永ふ中ちう。まづ其間そこの
下ふある皿をくるとるの。鴨の漱嫌をして食ふう。ラット。
漱形を寫へ呂る。コウ。そんちを向てんせる今約結んと
お髪ぷどんど根掘ぶい。今だやア髭下のはう抜人のを
うとゝーぐるの。そうるのがあるりんぐおいゝアかう

なり髭下の付く方がいせ。髭下のつゝ抜人者ゝ黒元結
ぐゝとぐゝ抹額をたゝく付さんさのふ。流汐とふふ
あへそうアまきぐゼのたト鼻毛とよまれて女房よ
まぐのうける男。万一あゝた大きる馬麻。

負て腹立つ下戸象棋馬鹿

碁敵ハありとゝへぐを象戯敵といふりのいまぐ異を
きるを初限ようちでめく我限とようぐるとりのふいぐ
こぐふたえくる。一枚二枚とまづを象棋もかちご

百人一首

百人一首

百人一首

徳亭三孝

ちがひなり桂馬の高上り分別もなく歩ふたてやうし。
金銀を振りたゝめ弱を惜こゝ雪隠へ浩〳〵と王ど
香車ふあげ〳〵こゝをかまゝとど小飛車で象戯を指
とたゞひの人ぐ。ぞこさこと象戯こゝひ〳〵きやう〳〵ぐ
始終やうまこゝそなゝど。一番勝つとちんとをゝ〳〵く
やらうとらひ。おのとゞ負ぶこゝふへなゞやうえぬすゞ。
たゝこゝをきゝへば連中。盤面とこゝえぬゝど蓋まん
ての助言ごゝけ。中ゝと六十たゞりの禅門一人のゞせ

あゞりて生をきりどこさこ。一番負こゝえこゝう風
敗軍く。山方八落人の刀八上ぐ。サアどなゝこどい代りこゝく。
まゞいつぷく住ちう〳〵居さん。けふい負ゞとむま風門
まゝ流ゝふゝませぬ只因一着錯。満盤俱是空ゞ。
二八と京人かゝとゝ二八
弱をかゝべかゞゝ「サア来ちう〳〵。どなゝこどい敵ゞ。
どいつぐこと。すぐぐ。山中ぐの日下雨山ぐものぐ。ゝや
くゝ出てこゝぐゝ「三吉「出ぐぐ。そんゝ弱味曙ふ大平
樂をいゝ出てくゝ男ゞたゝ移ゝド。一番敗く中ちう。

あるで高慢をいうて。もて不便ぢゃ。揉で出さう。
三 有ぐらいるぐぜ。もとと指さるでいに二度なるぬるのよ。
能く稽古をするぐいの。強い者と指さるのへほ象戯乃
筋がちりて甚だ忘れめ。ふよ。五吊 あるぐぎうく
いのよ。なんぐ此五脚等ぐ人うるふ口を出てうふ。
てあるくちいに歩三兵でおるぐ。自分番象戯や床店
象戯に隙ぐ遠う。ちりて歩の一まんの歩つけまぐ
ちりて三吉 サアとりと。ちりと腹帯でとちりてあるぐ。

もきとぢゃぐと。今よ待とぬるとぐとうぐ。ぷユレきてめく
もぐぜさるぐ。待なぐぜ。三吉 とりく。八 サアなるう。弱い
方うるぐ。ぜさるぐ。ちりて。ひて飛車角を二まんの金銀四枚ぐ
沢山ぐりとぐ。チョッ 二枚で指くちりう。三吉 コウおるるでけぐ。
なんの人を。たのくとちりて。コウ 飛車角を上移へた。
どくく捨さるきいるふるる。二枚でとちりめ。ぐ 飛車角を
二まんの八 なるるのりやちりくもぐ。ぐはいてぐぜ。ペンぷ。又脚言をとう
くおるるくぷ。サア。三吉 ちりう。八 ちりと。実をはくでん

なんぞ寄ると言そうな。草国の乱ぐわてと騒ぐ
まどつてさぶらや基べらと早いく。二番だろう金子
とろうと思へさるなら銀を寄をつく銀子
てぶれ角が寄ひとつのぶとうと言ぬのまだやア移。
おとぶく言ハア石田で開くさ。そをを突崩とふを妙
多あるさぶつとどつとと言ナニサ角が移智ぶる所さう。
ホイ。角の移智と移るまぶス。どうと野暮をさて
なるべ移べらや基べと言ハいく言ハ突うけろくラウト。なむ三

こうと二番あ中まんさ公。ホイ。二捉智おりろうぬ
言ハやおりろうぬ言ハ一番付くさと言ハアア角を
おとるまんさ。花車えうとおて。寄成うとい腹ら
ハテこと公ハこうまんさ。花車とり渡合べイヤ引く
言ハそをでと歳の樺焼。まづ香を一まべ。有ぐと
言ハ出るさ。出ろく指とッイヤ引ちやぶどうまる
言ハもーちやアどうまるとハテ。あてちまぶソコデ渡がうセ
る。桂でえるぶそまぶく花車のどざる乱づひもなと

まづ角をおもくと元の所よりひくべし
おくぞおく角をおもくと歩もつかぬ
こんちとみるとく 拙象戯は孔雀となるこの
うろうろのぞくなぐ三ぢこと小姑といふものがあるぜ。コレサク。宮へ
香をおくく何よりなるものあり。向の角の屏ッぷこと銀
を引き立へ 成ら ホイと。脚言をしで
うったたひ成移へでと角ぞ。呂ちさつまのこと
そこいふものとあるべ呂とあるスコウ 三ぢおもへの
小何かあるこ香桂あるこ歩だろう 元香桂さきふたくぞ。
歩どうまるく。下もの考へ体もよ似ろうぞいよう
ハア銀をのまとこいまぐふその銀をとる。ホイス角の
呂史 指とかまるこ 五 飛車ぞ居まくまりおなつく角乃
ろうろう 指こだろうしておるぞ。こく。二八が王八今の宮小真
裸ぐぞ。クリアルく。アレサ。そこを打歩て亀く飛車を
こ角く呂とを算限ぶ移へ 言 宮を実走ろうこと 五 さこ
く 又 ろうろう びを出て ライく三ぢ王のあくまの歩へ桂を打て

王様とさつし。其儀く。アレサ馬鹿な者ぐでも王のあるを
へ打て王様ふなるめう二八の面つや見ぐ〳〵えごさうど
コレく勝言ぐ多いう〳〵両方の金銭を持つ一斉ふ指さぐ
いせそそもぐよう〳〵パテナ。角ぐ利居る〳〵ゑるとなる〳〵
どト。まづ王を一間ぬぐしてイヤまづ移さ正五そうやく。
そこぐ。アレサ。そこ人金をおてぐいるのよ五ぐ陰ア
そもそこぐ。向ぐ銀ぐ上てぐいよく見さる
あうるもんぐへ。二八あと一人コ三人がうぐそ行でよう。

芋移さくそもといふめんぐ。ぞッと五番掛ふまづ一番移ゑそ
正五へうやく。移さ王様ぐ。どそもぐく。二八そいまくいそそ
家紙一ぐん移さくやらう三吉おめんが移るーと掛さぐ伊
移へる二八パテ一様へいくる三吉そんるう移さくやらう二八移り
しよ。家ゑ金ぐ居さくおそぐ移ゑ。移ぐ掛へ。
ソユデ。山様式ゑそぐさうとしく。そんるう〳〵移ぐ正三へま
ちぐやア三様ゑぐ先ぐぐ三吉三様ゑることまでまさる座
ちぐやうとさまう移へ正お坊さんのお対様ゑ殺ゑる

りんご吉いろる。不便るるぞ。移く。やらう二八さん先刻
の高言とは大きる相違ぞ。草間が移といろくるる
ぞ。ハテおやゝ一人だろう乃歩
ぢやア移へいきなりる三多わども言とるろう
かるるよりのうナザアどうぢぞ。ちをぶけ金銭とるぞよ言
ぐ王多とるるぶどうぢぞ。初王多目の薬ハ十二初王多
るるのう。宝う初王多へ入るぞ。逢るス。ふげとぞ。あくる
うらびゝりくとたてつけく。やらう。と吉王多ハうまるぞ

正
ハ十ト云ふぶく三く三兵その金で云らん。ハ云ぞ
さうちを云うくるまよとッユデおるる。吉金報角
桂山く。ハ角ハ二枚るよあるうら宝うあるぞを
るいぞんとう銭いるん〜。金二枚香桂ムウ。ふうん。
ふどぶる。あく往く。あく来る。云ます。ハテおもるく
ないうエ。まづ要宝銭うるあます。ハヤ〜移駒ぞ。
ぞんちいるるぞ。正と云ハ北情ハイヤハヤきこかすさ
象戯。と云云自身番や床屋と遣ものくさたるる

はんしやぎ
は象戯をうるあるうれ「コウ〳〵」三どゝくまうどゝ寒うう
打ひしゝハテサ 泥の腰へぴうさ「さうさく」。道が塞る
うう異非とう移べなうねトコロデあるまゝ兵車が見る。
間馬がきうどゝ筋違よさがるゝ。ぶびんへ歩ゝ「そゝ」でを
一枚ぶく移へ「正」そんうゝ寒の歩成成歩ゝ乃ゝ。
「コウ〳〵」紙幾も寒うトうらうぴうそゝぐゝ兵車何
「三吉」ゆうゝ右ゝ金二枚「香桂他人のまゝまうハテどうて
うゝゝまづ王ゝ「ヨウ〳〵」兵車が

利居ゝうホイうむ三ゝゝ移くゝうゝ「ゝ」ゝ又う
「正」又移てゝうゝ「イヤこゝ」未熟うゝぐ「草国
ゝゝまのあゆまりうの「移てゆうがいゝ可寝ゝう
「ウンヤ」移くゝうゝめゝ兵車角ゝ象戯を指ゝ
でゝ移へサア歩成突ゝ「どうゝうゝりゝの。歩成突て
疵をゝうゝのゝドレそうゝ造ゆうゝイヤまづ歩も
いゝゝゝ並けゝ。往ゝけの駄賃ゝ公金もゝゝゝなゝ
ゆう「ト」お出うゝゝうゝゝ虎の草ゝヤ禅紙うけゝ

ゆき三ヲヤ桂馬のつぎ禅八ハテ捨てくあさき移へ。空う駒い
いつく移へ向へ指ぐ三リリヤ王ゆ。象戯早馬のごとくとも
空ぐリリヤ王ゆ三ヲ行でき角でき搦ゑて十
九文歩へ下ゑ出るわどある三ヲまづ歩げろ三ハヒ王ゆ
三八ゑきろ三ヲ五ろ正ゑつちやア移へ五とく移でき
指ぐ三八ゑんぐ。代徒ハ。おゆくろき移へ。勝言も大げい
ゑきろいぐ。隠象戯ゑゑんく勝言があるもの。
ことちとろい隠へを吉移へのぐろう駿ゑぐくく。みるが。

あんまり極らいの移へ仕方ぐ。三吉ぐ象棋ハ高のきてて
へぐぐろう。其氣ぐ指居ゑぐ全面目ゑ勝言をるぐ。
指ぐが指めへがいつくぐるお世ろよ。きとゑ。ゑくろ弐対ゆ
ゑん仕ろ移へ。ゑっうぶさんろく勝言をるろう。盤ゑ駒
を真暗ぐ。ぐりゑぐろ指のぐ。そとぐろうえ
るゆをえんえ移へ。そとぐろう上ゆきゆゆる負る
ろへ。男ゑろう一人く進出てあゆ。さゑの對ゆふ移へ
えんゆきに。笑いるゆぐ負ハ移へ。ひろうと負ろ西が

歩兵
ぶ
さうぬ
つぼやぶし
聲
高
庵車の
將棋
あるの

三陵
亀相と
はさみて
將棋の
つぼ同士
金銀づく
たるの
はげやまて
まて真平三陵

そもそも甘茶式なるものは、せるのぐ。真汲猪負ゑう何乃
つきるまわるめう。ハテ高のしもとこ三吉へべよ。ナ。
へべの三吉と指をめへとこるげ祭へもど。時の袁畫
よもんこへ負めへめでもと祭へ。そもぐそもと猪負ゑ
時の運次第。当人の耳ひしぶ。其日の荒神さるぐア。
トまあ赤ゑうそ三あつ〻ゑ数「コウ二八さん。イヤ二八。是ゑ〻おろ。今何と
こそこ。おもぐと式へべ象戯ぐこそこす。おもぐへべ
ゑうべ。おもとる負〻こうぬへ。へべの産頭ぐコ他人まぜ

まどゑうらまとます〻をせうぐ。他さまも祖〻ござるよ。
へべといろもこへ不多ゑうべ祭へ「屋式ゑうね
へへべといふと式始こ野郎ぐア三そんゑうなぜ二
交祭とゆ〻こ二ゑ祭ちやアのふ祭へ一先の一交へ
祭せこぐやア祭へへ一交へ祭てもい。そのゑうゑ
うぬが方ゑへ勝言の為人がるとい。おらが方ゑも
勝言式ゑるめへけちまんを祭へぞ正コサ二八さん。
とう去こめごぞ。おめでを祭へ去づゑ去ゑうせ人外出が

悪いぢやアあるめへナニ外やが悪いとコレ正面でめへくちへ何の意趣遺恨があつて助言をするのゴコレヤイ五間も
對をごぞ。助言しさをつちへ片ッぺしらへ只もあろ後へ
象棋ハ象棋よ。ことをつちへ喧嘩の對をごぞ。碁で負
きべハテ象棋ぐ勝つちさ。象棋で負きべ喧嘩ぐ勝つ
のぞ。全体助言の為ざ寄よつち後へおまこぐ對をよ
るつちまハ皆芸人頭弦右ヤぐ見へコレサく二八さん。
まぐちぐふしるさいおまへの對をハ三吉さんぐ為ちも

その對をといつハ象棋さ。こつちおまへ喧嘩の場面でいつい。
ハテ助言しさ流を對をの三吉さんもだまつておろさる
くつ。こつちおまへをおちぐまりあさい。イエ合点
なりやせん。こをくつハぐうまちれ亀いつぺい
よしくこんせるのぞと象棋盤弦くさまハしべらぐう
のさるぐうのと大ぐ名あげく初ぐくひどくてさが
うんとおつしやんつくをアまう名んきいくさねと年
東乃慈意弦をてて不和よなる人万一あつた

大きる馬鹿。

古今百馬鹿初稿上巻畢

古今百馬鹿初稿下巻

江戸戯作者　式亭三馬戯編

お客をきる幇間馬鹿

「イヤこれは見かおひさしぶりでもおめにかかりまめでたくもなくお祝トキニどうしたものだ。其格好流行ものとうしたお肉がむづくらうモシ他の鯨舎や幇間なら今お坐敷が引くもとぐふ出るりとなんてもピイヤお久しぶりとる。

是へあのかたは山様とやらいふ坂さらうがそこいらをモシ私
どもへやさねサアくおゆんなさい何がおのりくて幇
間さらとぎ。あてるのも拙へ。ここ。ここもと拙くの
幇間でとぐぜくません。恥をいふ拙で利がきこへぬと
やつぐ。是でとおめさんまきこしこ醫者の脾さ。
四書五經も相應ふのぞいらさめんでごぜへます　こぶ子曰
ちんぷんくんよりへぷちよいときなさいチリくチリッのこかが面
白くてこ。去唄の先生へ月次の會漢ふ出ごかせ。声いろ拙

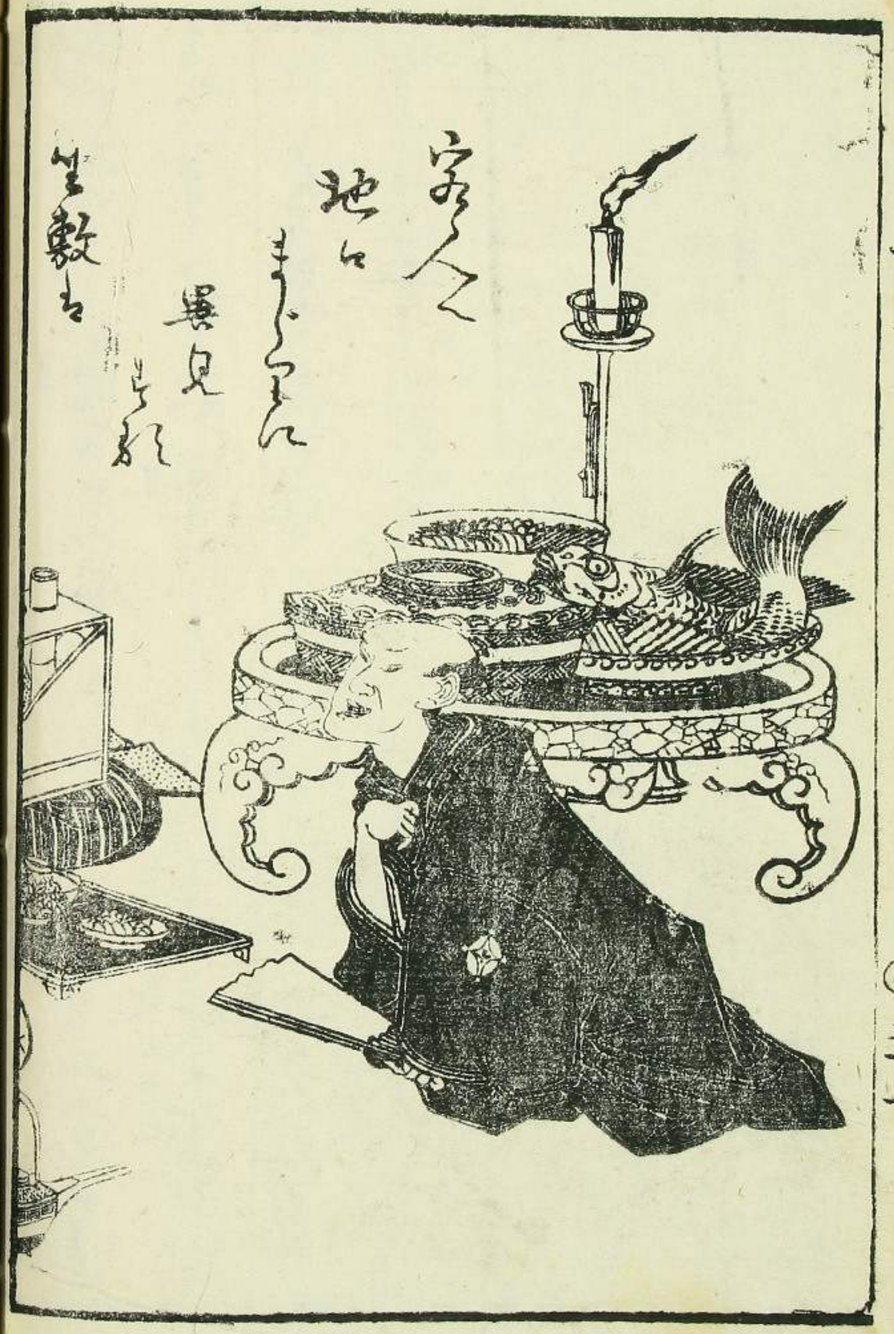
ま拙潮来形内。なんでとござふふのくをとういて。
をあくまり撥のあがまくるふをくごひ。常磐津文彦
富本豊ちあとを名告さうるお医者さんぐらく。サア
迫而の者が馬麻ふくく風茶を一貼煎らせる人也。
親仁の代脈る出ふが病人が不肖ぐよをを出して拙が
ちふしまさうといふぬぐり。イヤ勿論脈をとくく拙へて。
そちらこちら馬麻が上遊をる内ふざくと内幼尚スリヤ
親類へあづけるりこ。ようくく老実で親類の内ふ居ようぞ。

何が後人角が後人とお袋の多くの肉汁で引こんさんの。
そいつを代なして毎晩夜あそび。どうを伯母もあく
せい仕果く。又い相淡ふ及ぶと。今度ハ親類一家れ山づつ
ーや。閑魔さるが泡をなめることと。桑平肉が林香を
ふみぞんこと。孤云猫の後人濡面おやぢ。ちくを古瓦
及でさいつ減とある毎。そのくせあごけなのぐ。ゐ得
ふふさどをいつ。何でとゆけ目ハ後人伯父ぢさやイおくが
あづくるくゆ扉出とさせ後人で。甚乳ぐうせをを。

と言付るさいつくと甚乳ぐ中ち赤形ぐ何とすくるの。
歯ゆと四五日ハ二階ふ居て草冊子を凍居ぐ。サアゆう
虫が羅紗ーません。そとぐ隠くと法を書て先そまの
内の息子さいつぐくと母年。なし傳ずるなしべ
兼て仏易ー具とぐ。て度蒔とふ法ふなり
まーさ。ぐ小くくくくて疾そくと出ーく
ひらふとふ洒落ふをなくぐ。拙い甚ぐ限雀ぐ貴人
のとくぐ。ゆとてまてくるなしべ甚ふく僻易ス。てぐ

そうさまでいと古着屋ごらう。子もを。店に好次者れ古着が
あるゝゝとらつゝ面白し。ト刺べがの二才を杉んで。コ晩よ
仕く時着るのゝゝ山三枚をその棚へ変てゝを。と結
縮の着分ふ下着が何うをつなめで。羽織をあるゝと
ちさ出ちまづそらつを棚へ変く。着る内目覚をく
寝ましたトキに奥へ寝ちづまる。まづゝを探りなゞく。彼
夜装を着てゝ。ちゝて調ひゞゝ例の二才を紀く。
ゝり戸をあけそゝひの。大頑成就とい見えの本神

ゝ外で出やゝ。お聴の女。昼までいる。隠れゝ五分と遠
行く。ゝデゞゝ。お丹ゝ何うで。まづ何所ゝる丈ゝ西へと
着ぐ。ゝゝとの内（這入ゝ）向の内でびゝゝり。
ゝゝトいふゝまゝらハゝと。暗試合の幕で一向乱れ
ゝゝど。ゝチ。ゝとゝて体をゝゝる。ヤ昔ゝゝの何のゝ。
ヘンペゝとおたゝゝ小といゝゝ。結縮とゝひのゝる。
其漬の棚ゝ下ゝゝゝ見えて。着ゝをゝゝいま。まづゝ
着ゝ空色の煙斗目ゝ日暮方とい着ゝ。間着


家人の
池に
まゝ
異見
生數を

きんと
だ
まを乃
天神
亜夢三七

盆附なるといふ。素八丈で。下着ぶ羊羹色の羽織門ぶきさけ
不拘で。一ぢんの下ぶぐぐとぼ長くて隠く小袖。上着も
五すめはまりてんつるそん。羽織ぶ萌黄の紋紬子ぐ。
肩のあるうぶ金糸きてんつるさやなんと帯みけれつ
る形ぐさ。田舎の貧乏医者といふ衣装付ぐぶ厨斗目ぶ
ぐるいじやアぶぐぐんぶ。アさ。イヨサ今ぐことを笑へ。手附
い流石のうるさうも面うう火ぶ出やうぐデモ来てぶ拾うう
初対面ぶ且ぐぐと白地ぶ来て。先酒出ありはいてぶ。

何ぐう中でぐぐとおうぐうぬうぬう其疽の肉ぶりまうぶ
アさ。イヨモシ。此様ぶ話をさうとも生数の奥をおうといふ
事でなうさうさうのぶお。馬麻をはくしこうけを
かうかうやて。あうさんぶ教訓さ。ツテうさうなどい
その位ぶ放蕩ゆ名ぶ。其後親元へ呼ぶ来い帰ってけれど。
業ようというう中小立ません。急ぶ傷寒論を漬うぶ
金匱要略を漬うぶ。一業と用ぶ思うぐ。其間ぶ和ぶ入ぶ
目を移ぶる。さて没ってのちい一ぶ帰りもなう。家業と

借金の形ハ渡しくゝ多柏子編笠。一家親類へ三年ふさ
がり。ゝ方ゝ向ひてむしんきろずとなんこそつな暦も
あるめでこぜへきまそこぐゝ。蕗ハ方をたゝまけるる
祖の不仕合ト附合ハとあるべり。是非なく別源の太夫
の亥へ住て。まづ食客となりハけり。子モ。ろ後へも
ぐまそ。其いあ一へ見ハくゝとゝだしてろくゝとだりついさ
ちが。版を梯てろ豆腐を買徒ろ。あるゝきゝ生来谷
の三味線弾となり。ある附ハ茶を資負てお供ろでいハ。

たゞなるゝ七役を勤居る内。あちこちの引ぬろで
野幇間間抜の境界。さそ又こつ若界さそ。そのむゝ
お客の附分ゆゝ。ア幇間といふものハ羨しい。おもゞ今夜五
両つゝこぶ。あの徒ゞおもあろくなゝ。甚よ。後腹ゲ
病る。トコロガ。酒も出ハ酒を脇で好る貝をうろて。地ハや
酒落を抜ろない出ーろけて踊り踊ぐ。どろも氣さんゞで
若ゞなさゝろぐ。おもも別頭ハあのるゞとゝひ迎んぐ。
牛ハ預ゝ花鯨舎ぐ通ゝゝ来ゝゝぐ。接ハ這ハて

ゑてゝゆ量又遠ひさ。さてゞめの冒入見番の火鉢と首ッ
曳をてゝ。まだイまだり叩だろりよくくの品切でなけ
ゝやアこゝとゝいろゞ。ほひゝ名ごゞでロのかんくを
い糸ふゝくもゝ。ゞくくの辛抱で滑出ゝと下ゞ近次の
るゞで。家ゝ些茶ゝゝ老耄ゝ冒もなゝ。モウ見物が
草履をわく中腰よなんてゝゝとゝ下ごゝ納
ません。彩糸の内へ古糸ゝいゞめらゝる。何ゝゝ気
段をゝ後へゞや。あゝゝちがをゝゝく後へゝ。金ゝと

ゝゝぬゝをゝ。涙をゝて切ゝさ後へゞやアなゝゝゞ。走
でゝゝ面ゞ大きゝの。腰ゞゝきゝの。新人形をゝゝまを。
ゝゝゝゝゝ見へゞ。お客ゞイヤ是ゞゝいゝくゞありまを。
お客ゝよゝて下ゝゝ生ゝゝまるもありゞゝゝくゝゝ。
又頭横柄ゝはぎゝなくゆゝゝて。帯間ゝるゝいゝの大ゝ
猫のかゝゝ扱ゝゝゝゝゝのゝとあり。ゝをゝと芸ゞゝを
さをて責をゝてゝゝきゝもあり。あくゝゝゝ酒ゞゝり
飲をゝくゝゝゞをゝゝゝ後へをゝゝふゝるのをあり。中

三味線
三馬

三伝

ふへ又いとかなりの長小なんて長しいお客とゞぜんと
けもどゞまゞ孔雀い者方といふめく孫人のめさなんでを
潮来とは自分よ唄ふうり大きる支體でかてうふ踊
る者なゞゞ孔雀まゞゞぜんとゞチト通り者めうとお方
がうゞ子ゞ昌いゞゞ。お酒だうり方ちくかるかゞごうまゞ
いくゞ。ゞ又ゞたゞすゞだうりてかるゞゞ出孫孫拍さゞこの
だうりゞ場数を踏ゞ者でなけゞゞやゞゞゞまゞりません。
ゞテナ。ゞくゞと食ふうとめゞ児ゞ三人もあゞくゞ。兼ゞ孫孫

ゞ孫といふかゞをお居くゞチトおゞゞこお酒ゞゞゞ。ゞ乃一ゞ
桶と孔ゞくゞゞ片ゞ常ゞで。否なゞゞゞ青鯖をこゞゞとんて
古風でとめうゞゞ孫ゞだゞやゞうゞまゞせん。お婢義の一ゞ
もあゞゞゞ売ゞゞ者の掛金うゞゞ胸算用をゞうゞら
ゞイ酒蔵八ゞどなゞゞでゞゞいまゞゞ。昌ゞ具孫お迎い
ゞゞうゞゞゞ。付元気の大声でゞゞくゞも孫ゞ美ゞ
くゞえゞゞう。小癪ゞ嫌ゞうゞゞあゞてゞゞお客を
うゞめゞて喧嘩ゞゞとなゞゞゞ

まぐ〳〵して毒を呑むか酒を飲でイヱサなるく
しぐくめぐりごぜへません。そりぐ〳〵下戸へよ〳〵
上戸へ異一度〻大病をいたしまをと。異ぐ酒飲人の
一代記。まづ略して初の巻りぐぶ。巻の中乃浮虚者や
の〳〵者への風俗。ひとつ少へおもをさん〳〵の数別さざんと
えうけまをと所ぐ。おもをさんも三絃がお好で。絃おうまをけ
するを由格子ぐぶ。主をとをさてぐ今の男ふなんく
波賊しとむうをとをくようつけ出異見やてんぐ。まづ三

絃へこのごス。こいつと俗よをんやむせんといふやつぐぶ。蛇
皮線などの説へをぐ〳〵おいく〳〵。早い所ぐ猫乃革ぐ子。
其猫の皮を洒しとをつを箱へ押絃て。細い糸を三筋
引絃て。角とくいく〳〵をだろぐぶ。そのむか〳〵三アと嬉
しをめぐ。今へペンといるだろり。絃節乃代りふ紫檀ぐの
花櫚ぐのと奢へついををとど。嵐へ搖うぐ只へやるをを
いぐ能ぐぶ。糸の朱を奪へを悪む。鄭聲の雅楽を乱る
ことを悪むとをくありまをと。をれば異小唄ををくひ

三絃を弾くこと聖人も悪しきなりとて禁じ給へり。
なるべし。偖又幇間を悪しき。悪神を引連るゆえなり。
お出の不為ごとよく量見して酒ごろ。今おそれ
やごのごとく言を巧ふし色を含むる幇間の習俗
巧言令色は鮮し仁と孔夫子もおっしゃいし。
利口の邦家を覆す者を悪むとあれば。まづ利口なる
べし幇間はとてもまるべしおそれおかなくこと
くあつまりとお止なさい。偖。第一酒ごと和漢とい

ど酒を賞するは勝計べからざるなり。されどもおのも
なるべし。昔ご放蕩の媒ごと。万るのご酒ごと記るし。時珍ご
本草ごとく能毒を巻はなるべし。酒は百菜の長と
賞ておいて。多く食べ命を断つと云ましたる。私の
は異なるごと吾後悔して昔のあるのを思ふ。非
は所なるべし。ヲ世親ごこの俗物なごご。折檻なご馬耳
東風。勿論のこと。只今をヤス通り。私は放蕩ごとく
てすること者ごと。ヲ中ごと。酒は御止なさいこと。

五十有五ホしてく学ホ志ちといふ事を。十五のとき
うゝ遊里よりかゑり。三十ホして立のぐけしど身体を
滅し。四十にしてく不惑もいまぐふうゝと惑ふく
居るゝ。五十ホなりてゝ天命ごとあきらめませうよ。
六十ホして耳順ふゝ聳にかもるゝ二ツ。よくまさこ事ぶ
七十ホしてく心の欲とる所ふ後へどと。誠ぶおもど位る
ゝさ。でゝ出ちづ。もめくさん なぐも捨てく中と其
類ぶ。借ゝるいまめふ色道ぶ子色と為ぶ身トム

も寵といふぬ。かゝといふ不妬る唄を作りて。例の淫声
をゝんて唄ふ徒ハ。其罪いてなくぞや。ハテ賢を賢ゝた
色ふ換ふとあるゝさ。夫ゝとおぼ者で巻を打て。チト
おりゝづけゝろ。あちゝへとでう。お床ふ納ゝくいちづひ
まゝと。君子ホ三の戒あり。少之時ハ血気いまぐ定ゝう
ぐ戒むゝゝ色ふあり。なんでゝと色の方をつゝしま
ずんぐあるぐゝうぐ。必ぐおほくゝなさハ。君子
ハ其相を慎むゝハ。後代の庫ぐ。ぶうくゝを云ふなと

いるべからず。兎角色欲に耽るべからず。死活死ぬまでと
云ふ人情。そこを考へてこゝに忍べざる利ハあらず。吾
いまだ徳を好むこと色を好むがごとくなるものを見ず。
すべてもろもろの学ぶ方ハ皆酒色ハ身を
滅ぼ。惜いかな子へ父のそのこゝろをこゝぬ
とゝ尿と屎の穴よりぬるぬるとぬけるがごとく
その大盞ぐ引うけるうゝどうをなるゝ移へ朝ハ
道を聞くゝ夕ハ死とゝ可なりぐ。おめさんのハ

今道の聴立ハ酒と打死ぐ。惜しいかな。其公ぐ
でハ身上滅却ぐぞ。ア殘念因子賽。三てび練て用ハ
なりけとゝ射間うゝ身退くハ天の道なりぐ。
とハいふけとゝ吾お客とゝ人ハあゝぐ。ナニ厠
ホイおつきヤますせう。アいやゝ其お客ハあゝぐて
之を賜ハ諂へらなり。義をえくせぐ
ア。いゝ傍なる三絃をぶきりと踏ハ
客を練めて放蕩を戒め。酒をめゝと制間ぐ

一カ一あくび大きな馬鹿

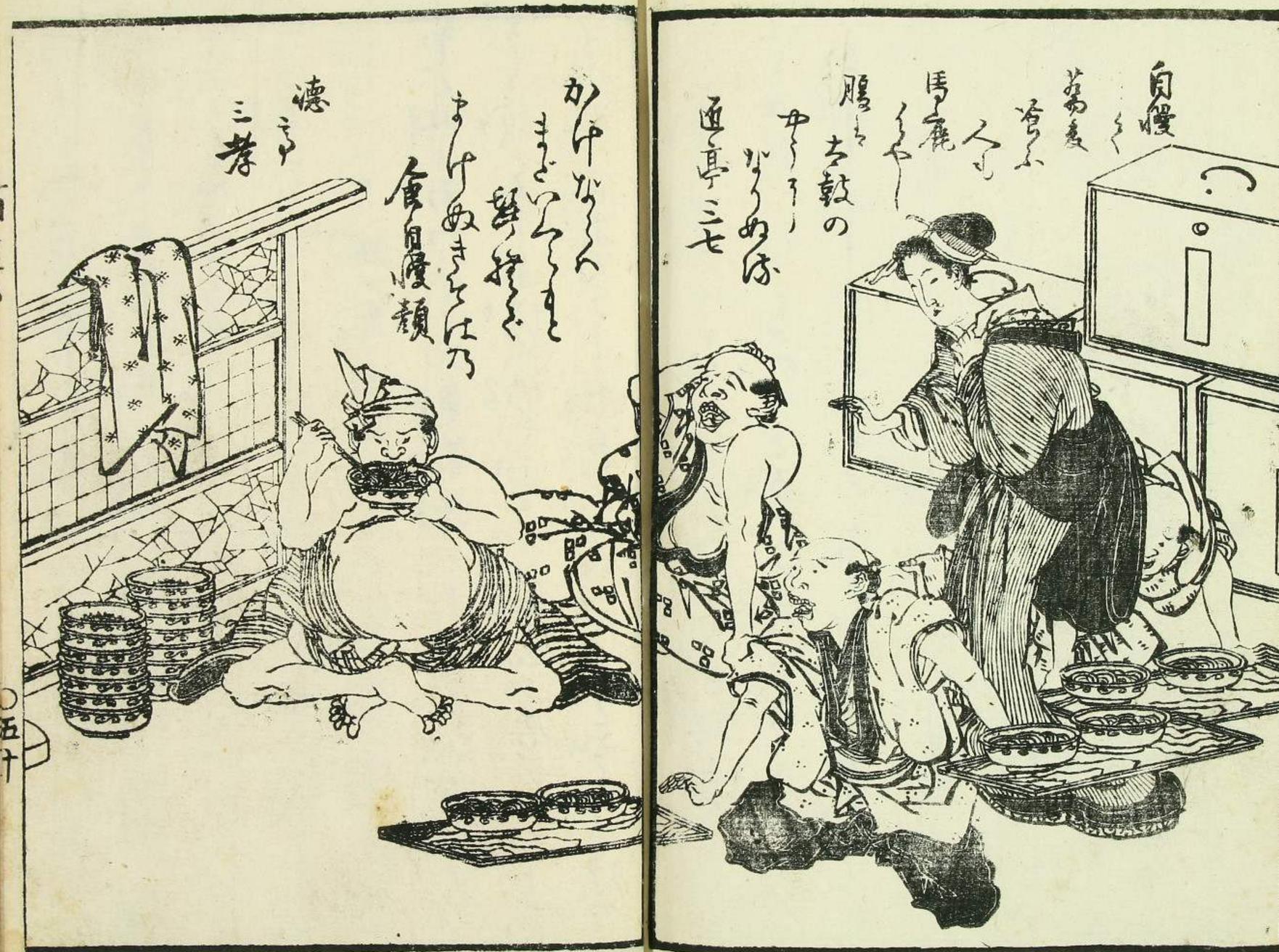
腹自慢きとる大食馬鹿

■長や食助さんお出なさい▲食どうぐ先生■大分色が青い
じゃア拵へくり▲ナニ色が青いと。ナニサ色が青くても乳わい
何ことうい●半うちをつくせ。何氣わの悪く拵へさるー
コウ長さん。聴る。ゆうべ食助さんいの。角の内ぐく食競を
ーく食淫ぐくる▲何食淫まるめろ。そんな下ぢる
拔とらふ。おーが拵へい富士の山でも這入る。本いるよ

近江の湖水い跡ぐ白湯よ欲せ■又大魚をちひさーこぜ。
コウ毒流ーふ蕎麦を食拵へろ。ポのび拵へ肉小ーう拵へ。
今茶さのぐ●口果報いあるへよのウ▲口果報いそれど。
高ぐ三脇だろ口よどーぐ■いろ食ふ▲次蕎麦ーぐ
二朱も食拵へじゃ食ーさで拵へ■ぐうせーぐの●ナド
ふいおーぐ踊ーろ。二朱ぢろ食ーろ。若食
ぢいおめーが拂をさるのぐ■イヤこいふ肝つぐ拵へ
実ふ食ふ▲何二朱だろ。ぺろーぐよ三伊勢屋のへ盛ぐ

好ぶ。方面なるべき賣ぶろ〳〵謝で壹貫ゞ食べる。其
代に謝礼がある。一斗小米でそのびく〳〵悪ぷ又とぎれく
箸を体もそん食べる。順〳〵のよく減〳〵拾くでも不ぶ
●美知く。トもそれ百あるべき▲倩きのふん食べる日よ。生むもんり
紀ると向う〳〵七夕の祝ひ赤飯が来る〳〵。茶漬ふい摘を
〳〵西ぶもんたり一重食べる〳〵納豆汁が出来
て汁が三十盃お飯が十五膳。スルトぷるとなく親類うち
う〳〵法るの饅頭が来る〳〵。一トの膳を九ッ恵仕意よ

〳〵茶を呑居ると。例の魚屋が来く河豚を買ふとい
う〳〵。五百ゞ大きるやつを五十ゞ製ると。大把の葱心
と三把小一本三十二文ゞ〳〵大きる大根を買せる。其
葱をぶく切〳〵せく大鍋ふいろゞい鑵者を製て
食べる。それを夫婦間に大根で汁ゞ出来る〳〵。まを
皆食べくたもんぷ。もと肉でる河豚とふ
のおとひとりゞ〳〵のとゞ一人ゞ食べる。蛮分
〳〵三十人おいろぷりゞ〳〵。お服もんぷど


自慢
馬鹿
腹
通真三七
徳
三孝
食自慢顔

のゝさぶらう。二十膳きぜんくらい美居ごぶ込こまれこぶそと
うゝちやぶくくして茶瓜の茶瓜が来て。けい粉膳を食
ふ往うと誘ふうゝプイと立ちく往うと下ぶ。食くととうゝふ
三十膳きぜんつく。肉へ肉ゝると夜食よ。イヤモウ夜食も食く
乳ふ移へがト膳へ居くまえてゝ。まぶらの味噌漬が七切
ちぶど四よわんてゝう。竟茶漬を十四五ちい捻込ぶそし
ゝ腹ゝふゝふ湯へ沈めてまると。善公ぶ居くく。もゝア
まぶど夜食おぶゝ七色茶漬へ往うとちふチョッたゝ

今夜食の食立ぶぶ。一膳つき食うと往うと下ぶ。善公めが
食競をしておとふ拂うせうといふ拂ぶこいつふおとぶ食
立を紹居てまると狂言ぶ。悪さを悪ー。一番えせつけて
呉女とや食くく。給仕の小女ぶ一人ぶ罗ふ合移へ
ゝ。三人加勢が対て運んぶ。もとぶ六十三膳食ふ間ふ。善公
ゝと三十膳で。椀を掴る中ゝ。渥を解く中。到頭降参して
代を拂てぶ。善公めへ向ゝふ屈むとぶかゝ移へで。雪
踏をまとる表くゝゝ夫ゝ。おゝア夫ゝ。

寝ちる小酒を温めて女房が呑居るのをうく。又五盃つさ合て。ぢとどうぐ。おとぐ脇ふはぐくもめおそうく

あるあん■別抜ぐ●子持の抜出宿ぐ居るといふが。

おもんの抜出何ぐかるぐらう。ト云ライそで居。そもあん

立て。仕ぐ。サテ▲ドくことをあ山もる■サア

あつへ西を▲ヲワトオ。ト。お目通りでたぐ出ぐふべる。

豊ハ山おの食抜。大食冠謙見公の苗孫。まづ宝初乃一

膳が魂魄蕎麦の中へ飛込ぐ。夢中であらがうらうぬ。

ぞろ〳〵。ぞろ〳〵。ぴ音とはりふお目をとあうを

まぜう。ぞろく。ぞろく。ワトことをふくまろ六猪■こう

くた猪でぐぐ。礼誘初穂と彩うとこヤさね。万一山胡

乱の山方へ入るとく倚くお目をとあうふしまう●蕎麦

へ山鬼敬よおうるまひヤス▲ぞろく。ぞろく。ぞろ

ワトことふく又六猪■ハイヤイ。メて十二猪。代誘二百文分

渋ますと●沙よ猪ろく六八四十八膳。代八百文分ぐ勝

負の肝門■サろく。た猪でぐぐ。目と白黒いうとを

お目をとゝまらせます▲そろ〳〵。そろ〳〵。そろ〳〵。
そろ〳〵ト是ふく又六猪■メて三百分お減●コレく
ゝ汁が残るゝゞ▲ハテサ。汁ぐ吸ふるゝそゝぐ和らぐ■なる
くたゝぐ〳〵ぐ〳〵▲そろ〳〵。そろ〳〵。そろ〳〵ヲツト是ふて
又十二猪。ウツ。ウく。ト。ヲく。■ヲツト。むせます。満ますゝく。
ゝを貫ぐゝゝゞ食ひ▲そろ〳〵。そろ〳〵。そろ〳〵。ヲツト是
ふく〳〵一服●メて七百分減ますと。汁ぐ三百汁ぐ三百▲そろ
〳〵〳〵。そろ〳〵。そろ〳〵。そろ〳〵ヲ。そろ〳〵。そろ〳〵ヲ。そろ〳〵。そろ〳〵ヲ

してくふへ食はるべきぞ。たゞ〳〵なほ生ぜ。今ぞ〳〵とく。
ようとぞ。ト宿へ帰るとその夜ま小大食傷の吐泻や。お医
者さま。こゝ金勢丸と天ようり賜ひ身体髪膚を。に腹のあるい
毀傷る者。万一あるべ大きな馬鹿

跋

書籍の跋文お定るの役切形ぢめ。式亭主人
一小冊を神ゆ〳〵来つく予が一言を乞ふ目を括
てこれをゆるふ。題して古今百馬鹿といふ予悚然
〳〵て脱びぞ〳〵て曰。足下我を百馬鹿中ゆ一人
ばかりして殊更に山書を投ずや。余が揚技隱
の傳を行ふ在何有乃郷ふ遊ぶ付稽古。罔釣と
云ふ浩然け氣を発ふ〳〵ふが為ゆ。女房ふ鼻

毛をとりまとめて長壽の基をなす。門爻小足をとり
ゆて筋骨乃健なるを試む。我り此何ぞ神凝
なるむや。武亭笑て曰。足いるもの凝なむ。宜
天下の奇才大明神様〳〵いなべし。ゆゑ〳〵ハ
此書小一結を附とよ。予忽ち完尔として曰。諾。武
亭舌を出〳〵去る。嗚呼世上恰閑乃子弟し
書とりて馬鹿ゆ馬鹿乗るとなる。天竺の文殊も
師利と端〳〵迷ふ。唐土去る孔明を堂おく
ト居まべし。猥ふ智慧をもつて小艇と碎ゆ
ゆゑ。連環と一抵ゆし通り着る意に做へ。終ふ
此偽と書して獨曰。時〳〵文化十年。管をもつて
天の川を窺ふ頃大ゆ京とるの秋。

中橋ゆをぐらい書

式亭先生。姓菊地。名久德。字太輔。俗称西宮太助。式亭三馬其戲号也。家公者八丈嶋。為朝大明神祠官。菊地壹岐守妾腹嫡子。菊地茂兵衛君。生先生于江戸浅草田原巷。第三街。先生居住不一。今居本巷第二街。並軒於高貫鬻藥為業。巧琉世于紙筆之間。黄口小兒。皆不知其雷名。但為其姓氏人名不知。因掲數語於巷末示衆人尔。

門人　春亭三曉欽曰　三曉

元旦